

慶良間諸島と海図

黒嶋 敏（東京大学史料編纂所）

◎近代海図の舞台になった慶良間

1873 年（明治 6 年）に作られた慶良間海峡の海図が残されています。

当時の日本はイギリスから測量技術を学んでおり、台湾出兵を控え、南西諸島の海上調査に取り組んでいました。

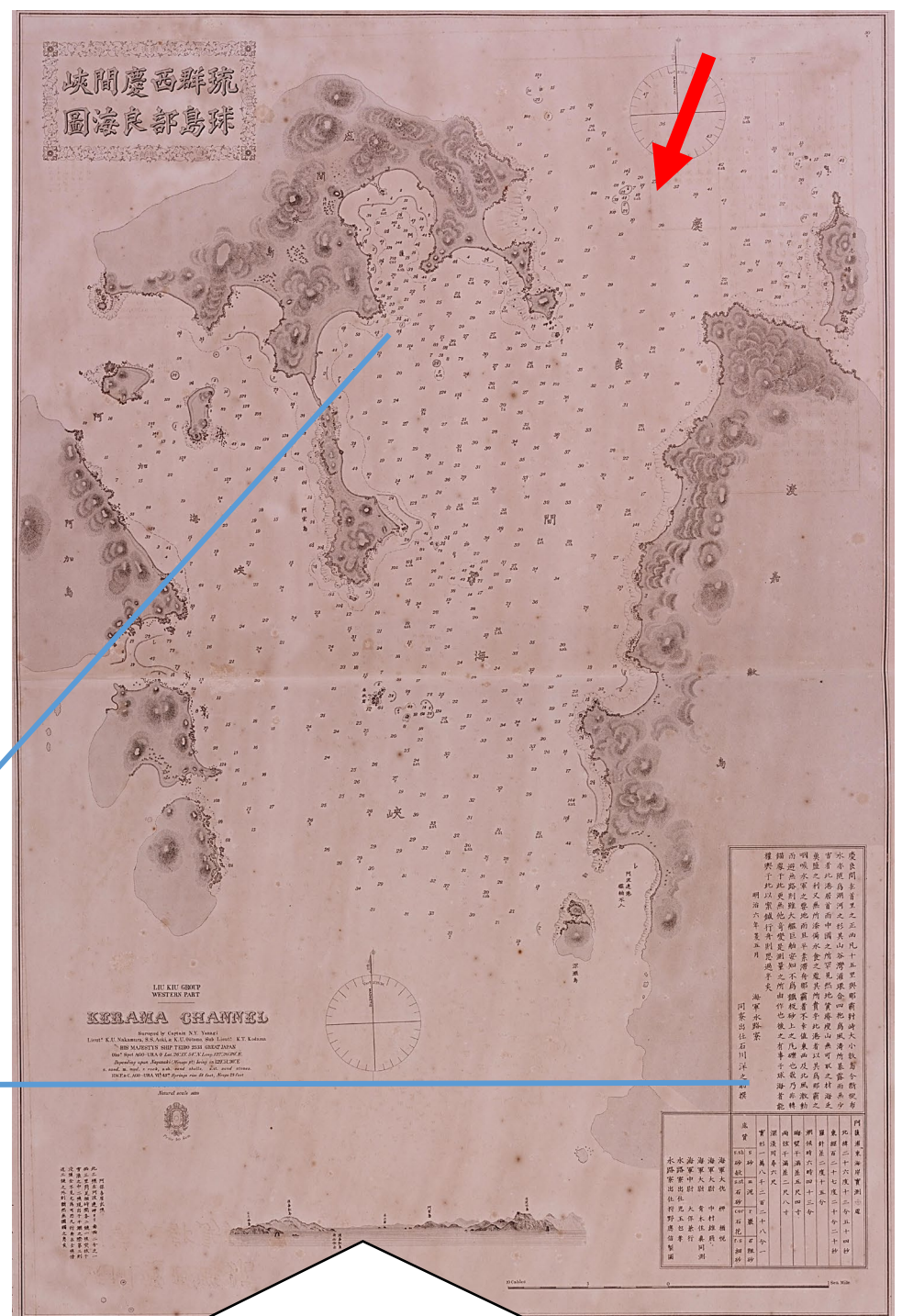
とくに慶良間諸島は、那覇に近く、地形に恵まれた天然の要衝であることから、「水軍の要地」になる場所として丁寧な測量が実施されました。

一行は慶良間で手に入る食料についても調査をし、湧き水の場所までも詳しく調べています。ただ、慶良間では水も食料も十分な量を確保できないため「那覇で調達するしかない」と書いています。

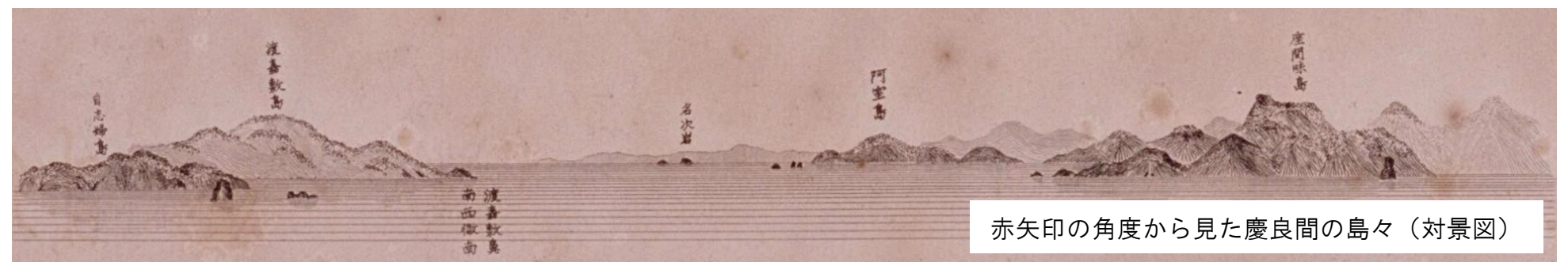
細かく測量された水深、丁寧に描かれた海岸線
→王国時代末期の慶良間の様子がよく分かる。

地形に恵まれた慶良間では荒波を避けられる。
水軍の要地になるだろう

「琉球群島西部慶良間海峡図」（国立公文書館所蔵）
（同館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/>）



赤矢印の角度から見た慶良間の島々（対景図）



◎測量中の殉死

1873 年の慶良間諸島での測量中に、一つの悲劇が起こりました。4 月 11 日、船員だった和久田勇次郎が 24 歳で病死したのです。

死因は脚気でした。長い航海中に栄養バランスを崩しやすい船乗りたちは脚気にかかりやすく、当時は命に関わる危険な病気でした。

しかも、測量中に天候が悪化して海が荒れてしまい、船が那覇に戻ることができなくなってしまいう不運も重なり、和久田は息を引取ったのです。

和久田は阿護の浦に埋葬され、いまでも残る墓石には、仲間たちが彼の人柄をしのんだ文章が刻まれています。



阿護の浦周辺（国土地理院地図に加筆）

和久田勇次郎の墓（2023年11月撮影）